

2013年度名古屋大学学生論文コンテスト

優秀賞 受賞

なぜ若者は「ヒトカラ」に行くのか

法学部 石川 純

1. はじめに

1.1 背景

近年、若者にとってコミュニケーションというものは重要であり、特に仲間内でのつながりは非常に大切なものである。LINE や Twitter、Facebook といったソーシャルネットワークキングサービス (SNS) の普及などもあってかその傾向はさらに顕著になってきており、『絶望の国の幸福な若者たち』(古市、2011)でも、内閣府の行った「国民生活選好度調査」において15~29歳の若者の実に60.4%が「幸福度を判断する際、重視した事項」として「友人関係」と答えていたと述べられている。スマートフォンが普及し多くの若者がスマートフォンを手にし、SNS などにより我々がコミュニケーションに費やす時間はどんどん増え、今やいつでもどこでも人とつながっているのである。また、就職活動においてもコミュニケーション能力が重要視されるなど、コミュニケーションは我々若者にとって欠かせなくなっている。

そんな中、時代の流れに逆行するような行為が流行している。それは「ヒトカラ」と呼ばれる行為であり、「一人カラオケの略。一人でカラオケに行き歌う事。」(はてなキーワードより)を意味する。「ヒトカラ」は特に若者の間で流行しており、少なくはあるものの、今では「ヒトカラ」の専門店も存在するほどである。

ではいったい、なぜこのような一見時代の流れに逆行しているように見える行動が生じるのだろうか。また、これは本当に時代の流れに反した行為であるのだろうか。本研究では、コミュニケーションが重要視される中、なぜ「ヒトカラ」をするのか、また、「ヒトカラ」は本当に時代の流れに反した行為であるのかを明らかにすることを目的とする。また、以上のことを明らかにすることで、若者が抱える今日的コミュニケーションの問題点の発見やその解決につながるだろう。

1.2 動機

私はこのような矛盾的行動が生じる理由として、日常的な若者のコミュニティの形態に問題があると考えた。そもそも集団というものは、常に共通の利益を追い求めるものであり、それは企業であっても、若者のコミュニティであっても同じではないかと考えたのである。若者における利益とはおそらく楽しむことであろう。つまり若者たちは共通の利益=楽しみを求めてコミュニティを形成すると考えた。

しかし、当然全員に共通する楽しみを見出すのは容易ではない。サッカーが好きな人がいれば野球が好きな人がいるように、好みというものは人それぞれである。また、同じ漫画好きであっても好きな漫画は異なるといったように、細部まで含めると、趣味趣向が完全に一致することなどほとんどないと言える。複数人が集まればなおさらだ。そのような中で、若者たちは複数人で集まった時、可能な限り皆がわかるような話をし、皆が楽しめるような行動をとっているのだと私は考える。

このことを今回取り上げたテーマである「ヒトカラ」に関連させて考えてみる。若者たちはカラオケにおいても皆が楽しめるように行動をするだろう。そうすると、必ず共通の楽し

みだけでは満たされない部分が出てくる。そのため、その部分を補う一環として「ヒトカラ」という矛盾的行为が生じるのではないかと思いついた。そのような仮説の下で、なぜ若者たちは「ヒトカラ」に行くという矛盾的行为をするのかを調査したいと思う。

2. 先行研究

2.1 カラオケ市場の変遷

調査について述べる前に、カラオケ市場がどのように変遷してきたのかを考察する。一般社団法人全国カラオケ事業者協会が平成24年4月1日～平成25年3月31日に調査した「カラオケ白書2013」にある図表1-1-2は以下のようなものである。

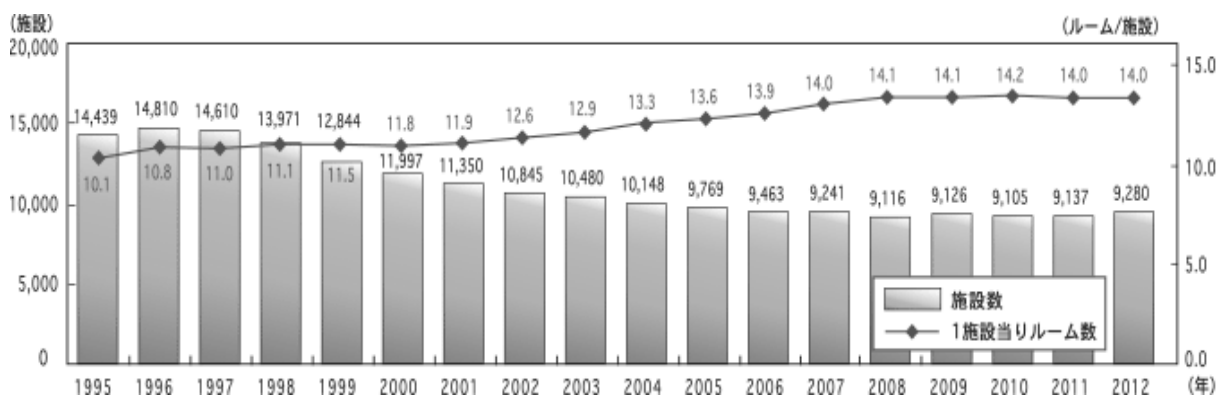


図1 「カラオケ白書2013」より、カラオケボックス施設数と1施設あたりの平均ルーム数の推移
(<http://www.karaoke.or.jp/05hakusyo/p1.php>)

グラフを見てみると、カラオケ施設¹は減少傾向にあるが、一店舗当たりのルーム数が増えていることが見て取れる。大型カラオケチェーン店の増加・進出により、小さなカラオケ店が少なくなっているために、このようなグラフの形になっているのであろう。また、一店舗当たりのルーム数の増加から、カラオケルームの大きさが以前よりも小さくなっていると見て取れる。部屋が小さくなったことも、「ヒトカラ」利用者の一因となっているのかもしれない。

3. 調査結果

今回の研究における調査では、多面的な考察をするために、アンケートとインタビューの両方を行った。

アンケートは、名古屋大学の1年生48人に男女・学部を問わずに行った。アンケートでは「ヒトカラ」経験の有無、友人とのカラオケの頻度、「ヒトカラ」へ行くことの抵抗感、状況

¹ 「カラオケ白書2013」ではカラオケ施設を「1箇所に2部屋以上のボーカルスペースを有する施設」としている。

による選曲の変化などを調査項目として挙げた。

インタビューは、名古屋大学の1年生7人に、アンケートと同様、男女・学部を問わずに行った。インタビューはすべて1対1で、時間は10～20分を目安にして行った。インタビューは「ヒトカラ」経験者・未経験者ともに行い、主な内容として「ヒトカラ」のイメージ、普通のカラオケと「ヒトカラ」の違い、初めて「ヒトカラ」に行った時のことなどを聞いた。

3.1 「ヒトカラ」の普及

まずは「ヒトカラ」経験者の割合であるが、アンケートでは、図2のように全体の27%が「ヒトカラ」をしたことがあると答えた。4人に1人以上というこの数字を見ると、決して少ない若者が「ヒトカラ」を経験していることがわかる。また、「ヒトカラ」に行くことに抵抗を感じるかという問いに対しては図3のように54%の人が抵抗を感じないと答えた。この数字は「ヒトカラ」に行く人の割合よりも多く、「ヒトカラ」の経験がない人でも「ヒトカラ」に抵抗がないと答えている人もいる。「ヒトカラ」の認識が広がり、恥ずかしいものではないと感じる人も多いようだ。

また、インタビューでは、「ヒトカラ」の経験はないものの、行ってみたいと思ったことがあると答えた人も多かった。しかし、「そこまで時間がない」「行きたいけど恥ずかしい」「カラオケ店まで行ったが、入り口で友人に会い諦めた」といった理由で行っていないようである。行動には移していないものの「ヒトカラ」に行ってみようという人は多く、これから「ヒトカラ」経験者がさらに増えるということも予測できる。

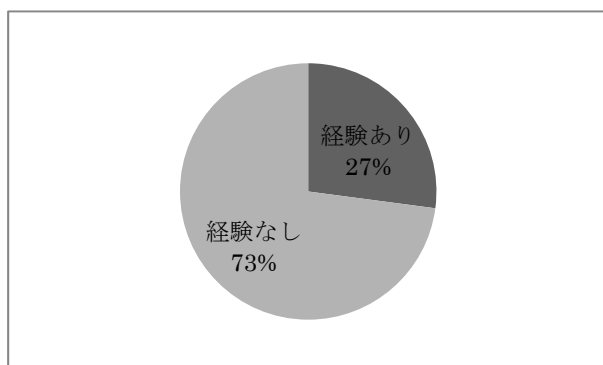


図2 「ヒトカラ」経験者の割合

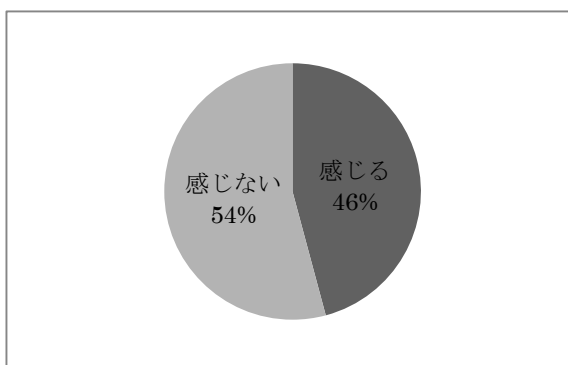


図3 「ヒトカラ」に抵抗感を感じる人の割合

3.2 状況の違いによる選曲の差

次に、選曲という行動に、周りの状況がどのような影響をもたらすかを見ていく。

まず「ヒトカラ」の時と複数人で行く時の選曲の差である。「ヒトカラ」経験者にアンケートで聞いたところ、「ヒトカラ」の時と友人とカラオケに行く時で選曲を変えるかという問いに対して、図4のように85%の人が選曲を変えると答えていた。どのように選曲を変えるのかインタビューで詳しく調査したところ、まだ歌ったことのない曲、メドレー、英語の曲、あまり有名じゃない曲、同じ曲など、「ヒトカラ」ではほかの人に気を使わず好きな曲を歌っていることが分かった。裏を返せば、友人と行く時には他人に気を遣い、自分が歌いたい曲を歌うというわけにはいかないようだ。

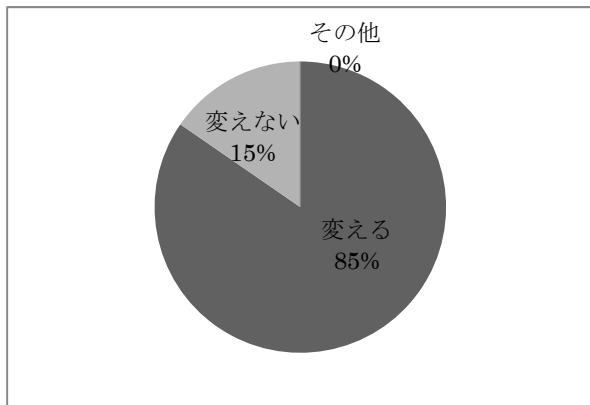


図4 「ヒトカラ」の時、複数人の時の選曲の変化

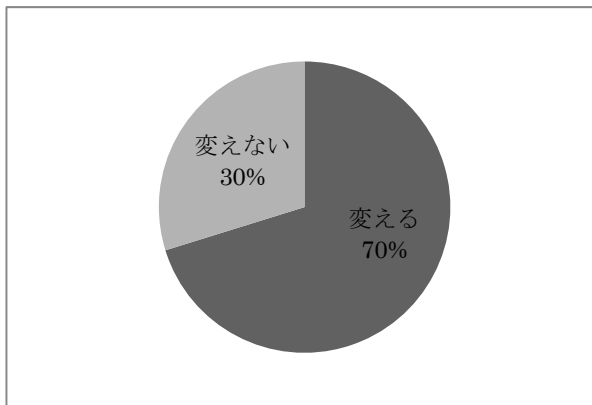


図5 一緒に行く友人による選曲の変化

また、全員にアンケートで聞いた、一緒に行く友人によって選曲を変えるか、という問いに対しては図5のように70%もの人が選曲を変えると答えた。非常に多くの方が場によって選曲を変えており、やはり若者の行動はその時のコミュニティを構成するメンバーにかなり強い影響を受けているようだ。インタビューでも、「できるだけ周りが知ってそうな曲を選ぶ」という声があり、場が盛り上がるか、他人が楽しめるかを重要視する傾向があることが分かる。

さらに、一緒に行く友人によって選曲を変えるか、ということ「ヒトカラ」経験の有無という観点から見ると、図6のように、「ヒトカラ」経験者は友人により選曲を変える傾向がより強いことが分かった。周りに合わせてしまうがために、本来自分が歌いたい曲を歌うことができないということは「ヒトカラ」に行く大きな要因となっているようだ。

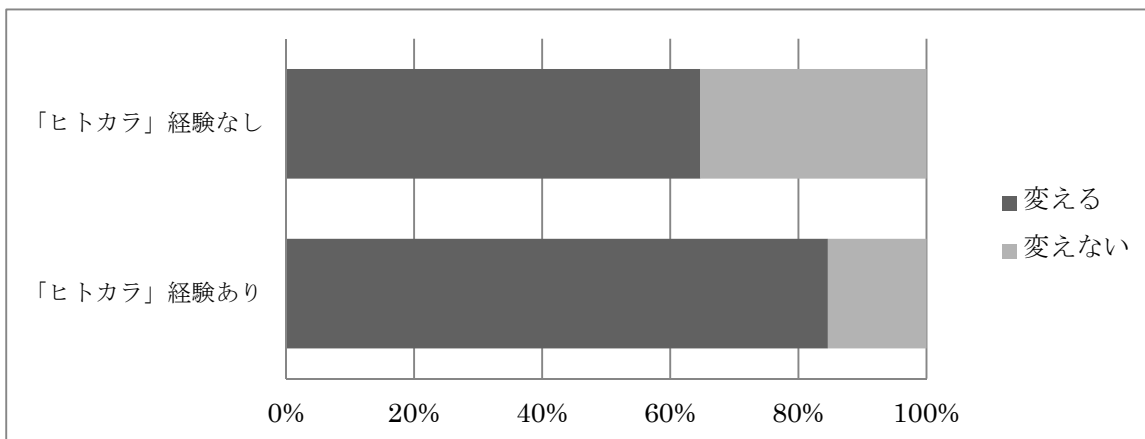


図6 「ヒトカラ」経験の有無から見る、一緒に行く友人による選曲の変化

3.3 カラオケへ行く頻度

次に着目するのは、カラオケに行く頻度である。アンケートで調査した結果、図7に見られるように、半数以上が月に1回以上という頻度で友人とカラオケに行っているようだ。やはり、若者の娯楽においてカラオケは欠かせないものなのだろう。インタビューにおいても、カラオケについて「友人とより仲良くなれる」「みんなで盛り上がる」という声があり、やは

り「みんなで」楽しめるが故にカラオケは人気なようだ。

しかし、カラオケに行く回数が多いとなると、やはりうまく歌うことができた方がいいだろう。歌が苦手な人もいるだろうし、苦手であってもより上手になりたい人もいるだろう。

「ヒトカラ」に行く、もしくは行きたい理由として「友人と行く時のための練習として」、「もっと歌の練習をしたい」「レパートリーを増やしたい」という声がインタビューで見られたのも、このためだと考えられる。このように、友人と行くカラオケの頻度の高さも、「ヒトカラ」に行く要因となっているのだ。

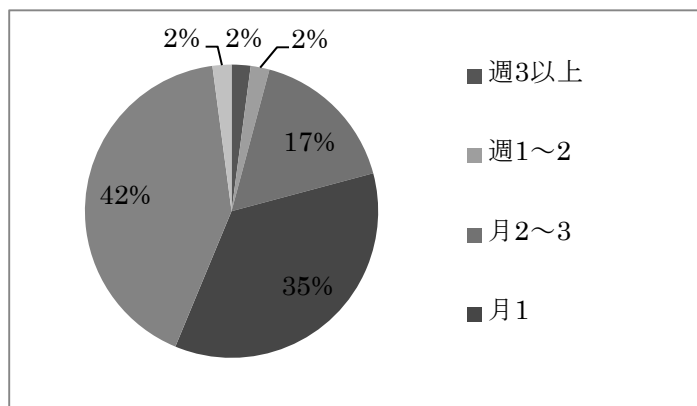


図7 友人とカラオケに行く頻度

3.4 「ヒトカラ」の利用目的

アンケートにおいて「ヒトカラ」の利用目的として最も多く見られたのは、「歌の練習」だった。インタビューで詳しく調査したところ、「友人と行く時のための練習」という声も多かったが、「英語の歌の練習」や「歌ったことがない曲の練習」、「他人に気を遣わず、好きな曲を練習できる」、「同じ曲やメドレーなども歌える」といった声もあった。「ヒトカラ」においては、やはり他人に気を遣わなくてよいという理由から、利用目的として一人ならでのものが多く見られた。また、付随的ではあるものの、ストレス発散も理由として挙げられた。人の目もなく自由に歌えるため、友人と行くことよりも「ヒトカラ」のほうがストレスの発散ができるようである。

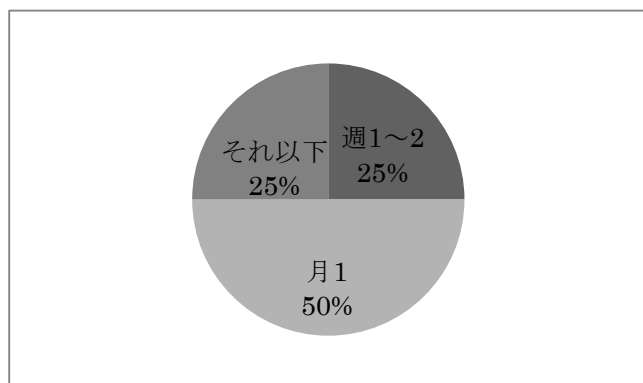


図8 「ヒトカラ」に行く頻度

アンケートで調査した「ヒトカラ」の利用頻度を見ると、図8のように、なかなか高い頻度で「ヒトカラ」に行っているようだ。インタビューにおいて「最初はちょっと緊張したけど、今は平気で行ける」という声があったように、二度目からはあまり抵抗感なく「ヒトカラ」に行くことができるようだ。また、友人と時間を決めるなど、計画の必要がなく、自分が行きたいときに行くことができることも、「ヒトカラ」の頻度が高くなる理由の一つなのだろう。

4. まとめ

今回の考察では、大きく分けて三つのことが明らかになった。

一つ目は、若者の「ヒトカラ」への関心が強くなっているということである。「ヒトカラ」に行ったことのある人はもちろん、行ったことはないが抵抗は感じない、行ってみたいという人も多い。多くの若者に「ヒトカラ」という概念が広がったことで、「ヒトカラ」は恥ずかしいものではなく普通のことになっているのである。皆の認識が変われば、「ヒトカラ」にも行きやすくなる。そのため、「ヒトカラ」に行く若者が増えているのだろう。

二つ目は、若者はカラオケにおいてもコミュニティに強く依存した行動をとるために「ヒトカラ」に行くということである。我々若者はその時属しているコミュニティによって、場が盛り上がるような選曲をする。そのため、自分が一番歌いたい歌は歌えないことも多々ある。そうした理由から、人に気を遣わなくてもよい「ヒトカラ」に行く若者が多いのである。ほかの人が知らない曲や歌ったことのない曲、同じ曲、自分の好きな曲など、友人とカラオケに行くときには歌いづらい曲でも、「ヒトカラ」なら思いっきり歌うことができる。コミュニティの影響を受けては行動が制限されてしまうために、「ヒトカラ」に行く若者が多いのである。

三つ目は、若者たちは友人とカラオケに行く頻度が高いために、「ヒトカラ」に行くということである。大型カラオケチェーン店も増え、幅広く進出したために、友人との遊びの選択肢としてカラオケが上がるのが非常に多くなった。それにつれてカラオケに行く頻度も高くなるが、その分歌が苦手な人は克服したいと思うようになり、苦手ではなくとも歌は上手いほうがよい、歌が上手くなりたいと思うようになる。そのため、友人と行く時でもしっかりと歌えるように「ヒトカラ」に行くのである。

上記の三点を見ると、「ヒトカラ」という行為はコミュニティを意識しているがために起こる行動のようだ。つまり、「ヒトカラ」という行為も結局はコミュニティに依存しているものなのである。調査前に私が矛盾的行為だと考えていた「ヒトカラ」は、矛盾したものではなく、むしろ時代背景に沿った、コミュニティに依存した行為であったのだ。

このように、若者たちは所属しているコミュニティの影響を強く受けていることが分かった。円滑なコミュニケーションを取るためには相手を気遣うことは重要なかもしれないが、私には少しばかりそれが過剰なように思える。今の若者には気が置けない友人が少なくなっているのではないか。

近年、「気が置けない」という言葉の誤用が特に若者の間で増えているという。文化庁が発

表した平成 24 年度「国語に関する世論調査」では、16～19 歳で「その人は気が置けない人ですね。」の「気が置けない」を、本来の意味である「相手に気配りや遠慮をしなくてよいこと」で使う人が 36.5 パーセント、間違った意味の「相手に気配りや遠慮をしなくてはならないこと」で使う人が 54.1 パーセントと、逆転した結果が出ている。社会背景が言葉に反映されると言うつもりはないが、私はこの結果が現在のコミュニケーションの特性を皮肉的に表しているように感じる。このままでは、名実ともに若者から「気が置けない」友人が消滅してしまうかもしれない。そうなってしまわないためにも、もう一度コミュニケーションの在り方というものを真剣に考える必要がある。

参考文献

古市憲寿 (2011) 『絶望の国の幸福な若者たち』 講談社。

一般社団法人全国カラオケ事業者協会 『カラオケ白書 2013』

(<http://www.karaoke.or.jp/05hakusyo/p1.php> 2013 年 11 月 10 日 閲覧)。

文化庁 平成 24 年度「国語に関する世論調査」の結果について

(http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yoronchousa/h24/pdf/h24_chosa_kekka.pdf 2013 年 11 月 25 日 閲覧)。

はてなキーワード ヒトカラとは

(<http://d.hatena.ne.jp/keyword/%A5%D2%A5%C8%A5%AB%A5%E9> 2013 年 12 月 08 日 閲覧)。